学校における若手教員育成

活用ハンドブック①

～学習指導編～

岡山市教育研究研修センター

もくじ

第１章　授業者としての基礎・基本

1　心構え　……　1
2　学習規律　……　2
3　教材研究　……　3

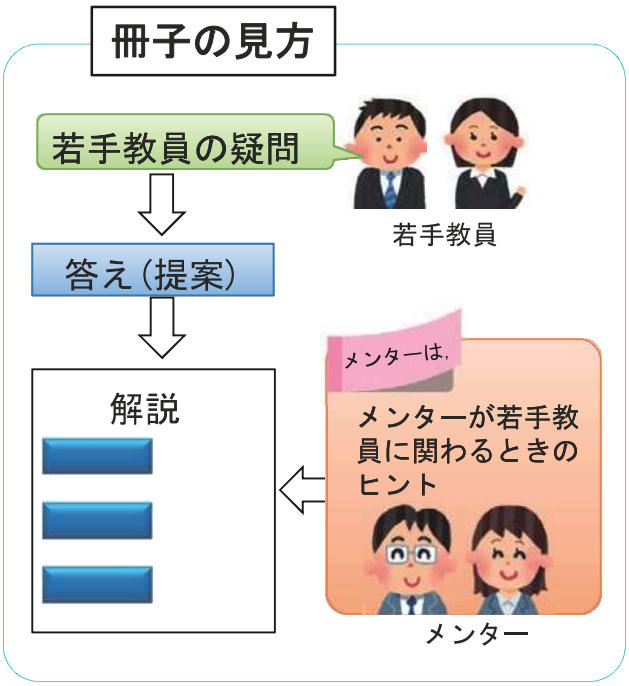
第２章　授業づくり

1　めあて　……　4
2　まとめ　……　5
3　発問と助言　……　6
4　机間指導　……　7
5　話合い　……　8
6　ノート　……　9
7　板書　……　10

第３章　公開授業に向けて

1　単元計画を作るとき　……　11
2　本時案　……　13
3　模擬授業　……　14
4　公開授業　……　15

付　録　「学習指導」チェックシート　……　16



この冊子は，若手教員には疑問に対しての提案を，メンターには若手教員との関わり方のヒントを載せています。

「学校における若手教員育成の進め方」（平成29年3月）と併せてご活用ください。

ＯＪＴとは，

- On the Job Trainingの略
- 校内における日常の業務を通じて，教職員として必要な知識や技能，態度等を意図的・計画的・組織的に高める取組

のことです。

メンターとは，

- 若手教員に指導・助言をする
- 若手教員と校内の教職員をコーディネートする
- 若手教員と若手教員をコーディネートする

人のことです。

1　授業者としての基礎・基本

1　心構え

「子どもの表情が硬いね」と言われました。
どんなことに気を付けるとよいのでしょうか？

若手教員

指導に臨む自分の姿をチェックしよう

「子どもは教師の鏡」と言われます。まず，自分自身の姿を見つめ直すことがとても重要です。

表　情

表情は豊かに
（笑顔・驚き・納得　等）

児童生徒は，教師の表情をよく見ています。教師の表情の一つ一つが児童生徒の学習意欲を引き出したり，子どもの思考を柔軟にしたりすることにもつながります。

※授業前に鏡を見たり，授業を録画したりして普段の自分の表情をチェックしてみましょう。

身だしなみ

状況に合わせた清潔感のある服装を

児童生徒は，学習にふさわしい服装で授業を受けています。また，教師もそのように指導しているはずです。児童生徒は，その指導している先生をしっかりと見ています。

話し方

○肯定的で温かく，共感的な言葉を使うように心がける。
（例）「よくがんばったね。」
「こんなことにも挑戦できていたよ。」
「さすが！」「なるほど。」
「そういう考え方もできるね。」　等

○児童生徒の表情や態度を確かめながら話をする。
・一文ぐらいごとに視点を移して，全員に話していることが児童生徒に分かるように。

○内容や場面に合わせて，抑揚，強弱，「間」をとる。

○短い文で簡潔に伝える。

○「えー」「あのー」などの不要な言葉を使わない。

教師が話をしているとき，口調が厳しかったり聞き取りにくかったりすると児童生徒の表情も硬くなり，次第に聞かなくなっていきます。児童生徒が理解し，行動できるようにするためには，教師の話し方がとても重要です。

メンターは，

若手教員の授業の様子を写真に撮ります。その写真をもとに表情等を話題にしましょう。どのような表情をしているか，客観的に分かり，表情も意識できるようになります。

また，声にも表情があります。ビデオやＩＣレコーダーでどのような話し方をしているのか聞かせることもよいでしょう。

さらに，アナウンサーや落語家などプロの話し方も参考になること等を伝えます。

メンター

2　学習規律

授業中，子どもたちが落ち着きません。
どのようにすればよいのでしょうか？

若手教員

児童生徒が納得できる学習規律に

学習への構えをつくることが，児童生徒が主体的に学び合う第一歩です。児童生徒が必要性を感じ，納得できるように，ねらいに応じてそれぞれのルールの意味を伝えましょう。

学びの基盤を支える学習規律

時間を守る	チャイムが鳴る前に着席し，活動時間を確保します。 教師は授業開始時刻には，児童生徒の前に立ちましょう。 （教師は終わりの時間を守る。→時間を守ってこそプロの指導）
授業は気持ちのよいあいさつから始める	あいさつは気持ちの切り替えのスイッチです。 まずは，教師が心がけましょう。
机の上を整える	学習に必要な物を机上にそろえたり，置く位置を確認したりして机上環境を整えます。望ましい机上の写真や絵を掲示し，視覚で伝える方法もあります。
静かに聞く	自分の考えを高めるためには，教師や友達の意見を聞くことが大切です。聞くときの姿勢や視点を学年に応じて設定しましょう。

メンターは，

学習規律には各校や学年によってきまり（スタンダード）があります。

メンターは，そのきまりのねらいを分かりやすく伝えることで，目指す児童生徒の姿が分かり指導が徹底しやすくなります。

また，指導者によってルールが違わないように伝えましょう。

メンター

学習規律定着のポイント

継続して確認　**ほめて指導**　**基本は６月末まで**　**教師が守る**

規律を守れている児童生徒をしっかりほめて認めていくことが，徹底していく上で重要です。また，少し経つと規律を守れていない姿が現れるものです。そのときに，よい例をほめて認めることで，定着を目指します。そして教師が見本となるよう規律を率先して守り，そのときの気分や相手によって指導がぶれないようにしましょう。

さらに学習を深めるために

学習を深めるために「話型」などを加えたり，発展させたりすることも大切です。また，発表時の児童生徒の発言をピックアップして記録することで，「話型」や「つなぎ言葉」が学級内で蓄積され，児童生徒に豊かな発表の仕方が身に付きます。

話すときのルール（例）

１学期
＜話すとき＞
- ～です。
- わたしは～だと思います。
- ●●さんの意見と同じで
  つけたしで
  ちがって

２学期
＜話すとき＞
- わたしは～だと思います。
  理由は〇〇だからです。
- つまり
- まとめると

３学期
＜話すとき＞
- わたしは〇〇でしたが，△△になりました。
- どうして■■と考えたのですか。
- つまり
- まとめると
- 例えば

→ 次年度へ

メンターは，

若手教員のクラスの様子を観察し，定着度をアドバイスしましょう。

話型やつなぎ言葉のよい例を話題にすると，若手教員が授業中，児童生徒の言葉に気付きやすくなります。

メンター

3　教材研究

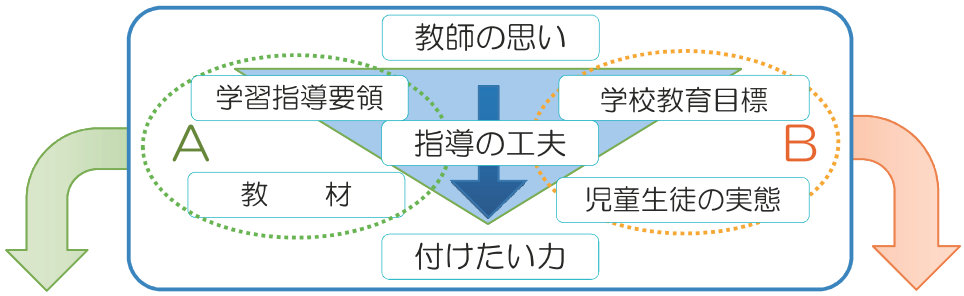
指導書通りにしてもうまくいきません。どのようにすれば，子どもたちに力を付ける授業になるのでしょうか？

若手教員

「深い学び」の鍵は，教材研究にあり

学習する主体は児童生徒であり，教師は助言，支援する立場に立つものです。教師は授業をつくる主体として，児童生徒に付けたい力を想定し，周到に教材研究に取り組むことが大切です。

教材と実態から



A学習すべき事を整理（教材観）

○１単位時間（１単元）で児童生徒に身に付けさせたい力は何かを明確に設定する。
　→cf.)学習指導要領／教科書
○教材内容をしっかりと分析・検討する。
　→cf.)単元(主題・題材)全体を貫く中心的なねらい／ねらいを支える基本的な事項

B児童生徒の実態を把握（児童生徒観）

○学習内容の前提となる教科の力はどれくらい身に付いているのか把握し，目指す児童生徒像はどのような姿か設定する。
　→cf.)前時までの様子／アンケート／学校教育目標

指導の工夫（指導観）

○児童生徒全員に適切な力が身に付くためにどのような工夫があるか考え，準備する。
　→cf.)学習問題（めあて等）／教具／学習過程／学習形態／資料／板書／ワークシート／発問　等

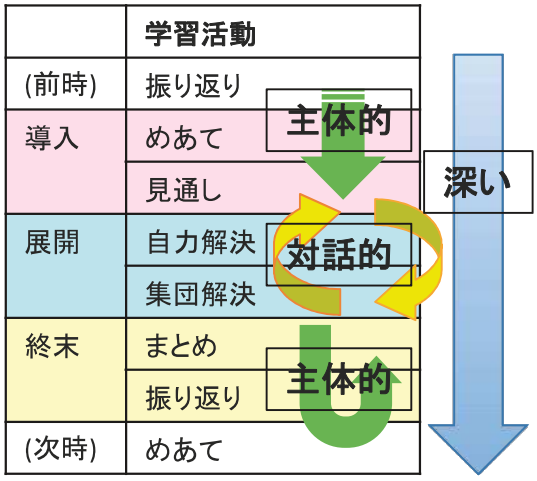
付けたい力
期待する児童生徒の姿

教材研究で「深い学び」の姿を描く

新学習指導要領では，「主体的･対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが明記されています。

そのため，三つの視点を生かした授業設計が求められます。

そして，期待する児童生徒の姿が「深い学び」の姿となるように単元や本時の目標を設定しましょう。



三つの視点を位置付けた本時の構成
※「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」を参照ください。

メンターは，

児童生徒に何を学ばせるのか，指導書等ではなく，学習指導要領を根拠にできるように，学習指導要領解説の該当部分を示したり，一緒に確かめたりしてみましょう。

また，教師自身が作品を読んで分析したり，予備実験をしたりすることも大事だということを伝えます。

日常ＯＪＴとして，一緒に教材研究をすることでお互いの授業力を高めましょう。

メンター

2 授業づくり

1 めあて

一問一答の授業になりがちです。
どうすればよいのでしょうか？

若手教員

「めあて」は児童生徒の道しるべ

「めあて」は１単位時間の授業の中で，「何を」「どのように」考えていけばよいのかを明確にするためのものです。児童生徒が主体的に学ぶためにも，「めあて」はとても重要です。

めあてのもたせ方の工夫

前時の振り返り ／ 発問 ／ 写真や実物，グラフ等の提示

↓

前時までとの違い

↓

児童生徒が疑問・期待・願い・思いをもつ

↓

児童生徒の言葉を生かしてめあてをつくる

児童生徒が，興味・関心をもつことが「主体的な学び」の第一歩です。
そのためには，教師が一方的にめあてを与えるのではなく，必要感をもつことができるような手立てが必要です。

メンターは，

児童生徒にとって必然性のあるめあてになっているかどうかは，表情や活動の様子を見れば分かります。
児童の様子から若手教員に伝えることで，気付くことが多いはずです。

メンター

提示するめあての言葉の吟味

児童生徒が，考える視点や取り組む視点をもつことができるように，めあてを設定する必要があります。児童生徒が見通しをもって自力解決していくために，どのようにすればできるか「学習方法」をめあてに具体的な表現で入れる方法もあります。【ねらいの達成に結び付く条件＋具体的な学習活動】

学年・教科	本時の「めあて」の例
小１・算数	数図ブロックで／おはなししよう。
小２・国語	こわいところやがんばっているところを／見つけよう。
小４・音楽	前半と後半のちがいが分かるように／歌い方を工夫しよう。
小６・家庭	服の特徴を調べて／涼しい服の着方を考えよう。
中１・国語	新聞を読み比べて／報道の仕方の違いについて考えよう。
中１・数学	与えられた式になるように実際の場面を考えて／問題を作ろう。
中３・理科	単細胞生物と多細胞生物ではどちらが環境に適しているか／話し合おう。

注意！！
児童生徒が同じスタートラインにいますか？

児童生徒と一緒にめあてをつくったとしても，そのめあての理解度が異なると，自力解決をするときにばらつきができてしまいます。「めあて」を理解し，課題意識を自分の問題として捉えているか，児童生徒の様子や表情から読み取る必要があります。

メンターは，

若手教員は経験が少ないので，経験したことのある学年の内容しか分かりません。メンターが，異校種や他学年，他教科等，広い視野を伝えることで，既習事項やつながりを明確にすることができます。

メンター

2　まとめ

子どもが，ノートに自分の言葉でまとめることが難しいです。

若手教員

何をどのように振り返るのかを明確に

本時に何を学習したかを整理することで，学習した内容が明確になり定着に向かうとともに，児童生徒に１単位時間の学習の成果を実感させることができます。

「まとめ」で何を振り返るのか

学習の成果

〇何を学んだか
〇次は何を学びたいか

〈例〉～が分かった。〇〇は分からないから次に調べたい。

学習への取り組み方

〇どのように学んだか
〇次はどのように学びたいか

〈例〉～が分かったのは，△△の方法で▲▲したからです。

友達との関わり方

〇どのように解決したか
〇次はどのように解決したいか

〈例〉初めは，□□だと思っていたけど，友だちの考えがきっかけで■■になった。

「まとめ」でどのように振り返るのか

「めあて」の確認

〇「めあて」に対応した「まとめ」にするために，もう一度「めあて」を確認する。

本時の学習の確認

〇教師が授業の内容を確認する。
〇大切な言葉を板書に位置付ける。
　→色／大きさ／矢印／囲み／ライン等　（p.10参照）

「まとめ」

〇本時に何が分かったのか，どうやって問題解決したのかを整理することで学習した内容を明確にする。
　→「まとめ」に本時の目標に結び付くキーワードが入っているか確認する。
〇児童生徒の言葉を使ってまとめる。
　→児童生徒自身がキーワードを使って，まとめを書くことができるように工夫する。

次時の学習につなげる

〇動機付けをする。
　・はっきりしなかったことで次に確かめたいことを尋ね，次時の見通しと期待をもたせる。

家庭学習につなげる

〇学習したことの練習や復習をし，学力の定着へ。
　・教師が課題を出し，宿題とする。
　・児童生徒が自主的に課題を設定して自分から復習する。
　※家庭での学習習慣の確立を図るために，宿題や自主学習の内容や分量等を校内で共有する。

まとめの時間の確保のために

〇１単位時間の授業の見通し
　→教材研究で各活動の時間の設定
　(例)めあて7分　展開30～35分
　　まとめ5分　次時の見通し3分
〇教師の発言・指示の見直し
　→不必要な教師の発言のカット
　→指示の簡素化(ICTの活用)・視覚支援
　→学習規律の徹底　等

メンターは，

まとめが，単なる感想に終わらないように，児童生徒一人一人が，本時の目標を達成しているか，ねらいに結び付くキーワードが入っているかを見取り，若手教員に伝えましょう。

メンター

3　発問と助言

発問すると子どもたちの思考が止まってしまいました。どんな発問をすればよいのでしょうか？

若手教員

教師の発言はできるだけ短くて分かりやすく

児童生徒が活動する時間を確保したり，「主体的・対話的で深い学び」になるようにしたりするためには，教師の発言は簡潔に，１回で児童生徒が理解できるよう言葉を選んで発問しましょう。

発問のねらい

発　問

・児童生徒に考えさせたり活動させたりするための問いかけ

［導入時］

○学習経験（興味･関心，体験等）を問う発問
○復習のための発問
○興味・関心，問題意識を高めるための発問

（例）「前時までとどこが違いますか。」
「どうしてだろうと思うことは何ですか。」

［展開時］

○課題をつかませる発問
○ヒントや手がかりを与える発問
○矛盾，対立，葛藤を生むための発問
○発想の転換を図る発問
○イメージを広げる発問
○多様な考えを引き出す発問

（例）「○○と△△をつなげる（比べる・まとめる等）とどんなことが考えられますか。」
「今まで学習した□□を使って考えるとどうですか。」
「もし，○○がなければ，どうなりますか。」
「その他の全ての場合にもあてはまるでしょうか。」
「この先どのようなことが想像できますか。」

［終末時］

○問題整理のための発問
○抽象化，一般化のための発問
○定着，練習のための発問
○評価のための発問

（例）「今日の学習で分かったことは何ですか。」
「みなさんの生活のどんな場面で使えますか。」

よい発問

○簡潔・明瞭であること
・意味が明確で，何を考えればよいか全員に分かる。
○広がり，深まり，方向付けがあること
・想像，対比，批判を促したり，新しい考えを引き出したりする。
○タイムリーであること
・授業の流れや児童生徒の思考の流れに合っている。

よい助言

助　言

・児童生徒の学習理解を助ける示唆などの働きかけ

○称揚
・何がどうよいのか，具体的な根拠をあげてほめる。
○つぶやきを広げる。
○児童生徒の思考の整理。
○つまずきから正解へ。
○「誤答から学ぶ」雰囲気づくり。

（例）「次は，●●のことから考えてみよう。」
「今まで勉強したことは使えないかな。」
「▲▲に着目して同じ仲間に分けたらどうなるかな。」
「みんなのために，どうしてそう考えたか教えてくれる。」

メンターは，

発問のタイミングや「間」の取り方について，授業後や反省会で話題にしましょう。
その時，どの発問のときがよかった（よくなかった）か若手教員に問うことで，自分の発言を振り返ることになります。

メンター

「静寂」を恐れないで

発問や助言の後に児童生徒の反応がないと，教師は不安や心配になり，言い直したり，他の言葉で問いかけて最初の問いからずれてしまったりすることがあります。そうなると，児童生徒の思考を止めたり混乱させたりします。沈黙や「間」は，緊張感と考えることの必然性を高めます。

4　机間指導

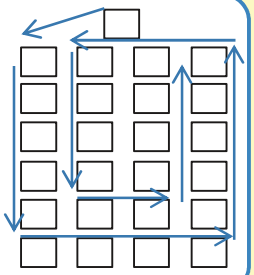
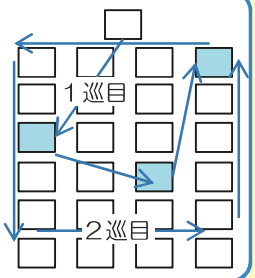
全員のところを回ることができません。

若手教員

授業の流れと子どものやる気の持続は机間指導で

一斉授業の中で個を捉え，個を生かすためにも，机間指導は大切です。漠然と指導するのではなく，指導の過程の中に計画的に位置付ける必要があります。

机間指導で大切なこと

	把握する	称揚する	助言する
目的	○どれくらい理解しているか。（理解しにくい箇所等） ○どのように表現しているか。 ○どのような工夫をしているか。	○努力や考えの過程を具体的に認め，ほめる。 ○自信をもたせる。 →全体発表への意欲へ	○めあてに即していない場合 ○どうしてよいか分からない場合 ○間違っている場合
準備	○実態や学習状況を記録するもの ・座席表 ・教材文 ・チェックリスト　等	○本時の目標や学習内容の把握 ○児童生徒の前時までの様子のチェック	○「どこにつまずくのか」など児童生徒の反応を想定し，支援の手立てを考える。 ・声かけ ・ヒントカード　等
回り方（例）	一人ずつ座席表を見ながら全員をチェックする。 	**赤ペンを持って** ○ノートやワークシートに丸などの印を付けることが，児童生徒の自信につながります。	気になる児童生徒から先に回り，その後全体へ。そうしてもう一度気になる子へ。 
その後の指導	○意図的指名の順に生かす。 ○一斉指導の手立てを修正する。 ↓ 話し合いを深める。	○個別指導 ↓ 自分の考えをもって，話し合い活動に参加。	○個別指導 ↓ 活躍できる発言の場を与える。

机間指導のポイント

- **重点的に**　・気になる児童生徒はしっかりと。
- **計画的に**　・いつも同じ回り方にならないように。
- **目的をもって**　・学習の様子の把握と努力や考え方の称揚と助言。
- **声の大きさ**　・恥ずかしい思いをさせないように。・全体の思考を止めないように。

メンターは，

若手教員が，机間指導したルートや支援をどのようにしたのかを記録しておくと，机間指導の効果や偏りを確かめる材料になります。

メンター

5　話合い

考えを広げたり深めたりする話合いはどのようにしたらよいでしょうか？

若手教員

話し合う話題の吟味と目的に応じた話合いを

話し合う必然性があり，話題が児童生徒にとって考えたいものになっていることが重要です。また，目的に応じて学習形態を工夫することで，児童生徒の学びが，より主体的になったり対話的になったりします。そうなるためには，学習活動の場面，時間，人数を吟味していく必要があります。

交流したいという必要感

児童生徒が「なぜ」「不思議」「どうすれば」などの具体的な問いをもつことで，話し合いたいという思いをもちます。そして，話合いを通して，自分自身の考えが広がったり，深まったりすると，話し合うことのよさを児童生徒が感じることができます。

交流する目的

児童生徒が話し合いたいという思いをもったときに交流活動の設定をすることは大切です。そこで，さらに交流する目的をはっきりさせてから交流活動に入ると，全員が話合いに参加でき，考えを広げたり深めたりすることにつながります。

話　題
- 焦点化された問い
- 紹介したい意見・感想

等

＋

目　的
- 考えを仲間分けする。
- より良い考えを選ぶ。

等

話合いの指導のポイント

○話し合う課題や内容が焦点化され，共有されていること。
○一人一人の考えが，根拠を基に明確になっていること。
○資料・ノートを基に，自分の考えを説明できること。
○疑問や分からないことが明確になっていること。
○話し合う方法や手順を理解していること。
○限られた児童生徒だけではなく，一人一人に発言の機会があること。
※それぞれの考えにずれや対立などがあると深まる話合いに！

メンターは，

児童生徒がねらいに結びつく観点（理由や根拠）を明確にして交流しているか確認するために，児童生徒の発言や記述等を観察することを伝えましょう。

メンター

子ども同士のつなぎ方

児童生徒の発表を教師がうまくコーディネートすることで，理解がより深まったり，みんなで考えようとしたりする態度が育ちます。

○発言者の考えを他の児童生徒の考える材料にする。
(例)
「○○さんは，どうしてこのように考えたのでしょうか。」(背景や根拠)
「○○さんと△△さんの考えはどこが違うでしょうか。」(相違)
「○○さんの考えとよく似ているのはどの意見ですか。」(分類・比較)
「もっと具体的にするにはどうしたらよいでしょうか。」(具体化)
「○○さんと△△さんの発表をまとめるとどのようなことが言えますか。」(関連付け)

メンターは，

授業後に，授業記録の児童生徒の発言の中で，どの発言を取り上げるか，教師がどのように切り返すかを振り返る場を設定しましょう。

メンター